

新たな移動の楽しみ（サイクルトレイン）

自転車を生鉄道の車内にそのまま持ち込むことができる「サイクルトレイン」が近年、増加している。

国内の鉄道では自転車を列車に持ち込む場合、車輪を外して袋などに入れる方法が一般的とされている。だが、日常生活で多く使用されているシティサイクルは車輪を外すのが困難で、持ち込むことは容易ではない。一方、サイクルトレインでは分解をしなくてもよく、日常の移動やサイクリングに手軽に利用することができる。

国土交通省によると、サイクルトレインは2023年度には臨時運行を含めて152路線で実施された。近年は大幅に増加し、ローカル線での導入が目立つ。県内では、近鉄の山田線・鳥羽線・志摩線、養老鉄道養老線、三岐鉄道三岐線、四日市あすなろ鉄道八王子線、伊賀鉄道伊賀線において一部区間や全部区間または一部駅を乗降可能駅として実施されているほか、JR東海が紀勢本線の紀伊長島駅―新宮駅の間で運行実証実験を行っている。近鉄では春・秋限定で大阪・名古屋からの観光列車でも導入している。

また、県は24年3月に改定した「県自転車活用推進計画」に基づき、イベントを通じた周知や鉄道会社の取組を支援することでサイクルトレインの普及を図っている。導入が進む背景には、自転車への注目が高まる中、鉄道会社の新しい客層を取り込みたいという狙いがあり、地域の観光活性化の効果も期待されている。

課題もある。列車内での乗車スペースの確保のほか、駅へのスロープ設置が必要になる場合がある。混雑時の安全対策も不可欠だ。予約制にしたり、自転車を持ち込める時間帯や車両を限定したりと、鉄道会社は各社

の実情に合わせた工夫をしている。また、レジャー利用の普及には、サイクリングコースを提案するなどで地域との連携が欠かせない。

自転車で移動すると車では見過ごしがちな風景を発見する楽しみも生まれる。サイクルトレインで新しい旅行に出かけては。

（PPP/PFI事業部 主任研究員 川北 晃二）